

# いたずらっ子オーチス

ベバリイ=クリアリー作 松岡享子訳



933 Cleary, Beverly  
(NDC)

いたずらっ子オーチス

ベバリイ = クリアリー著 松岡享子訳

学習研究社

220P 図 23cm (新しい世界の童話シリーズ)

原題: OTIS SPOFFORD

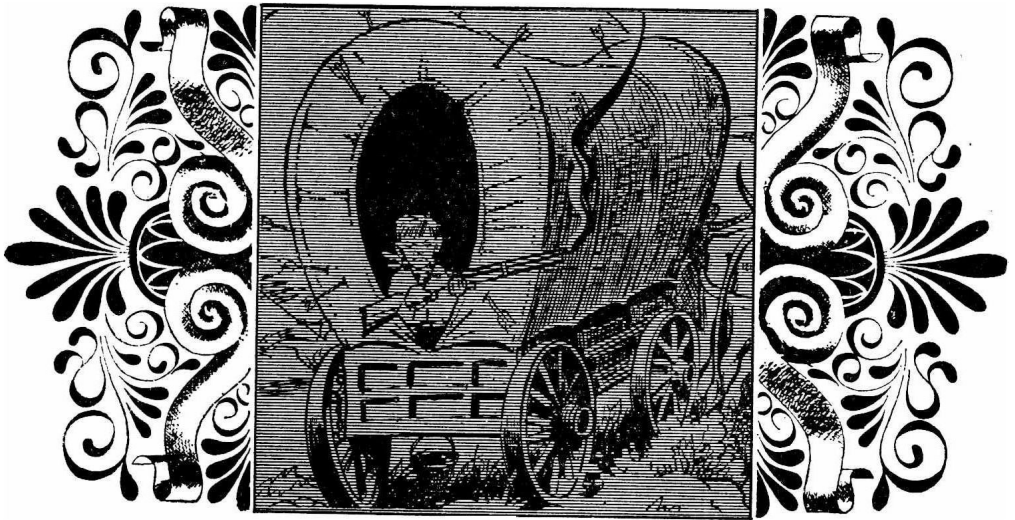
たずらっ子オーチス

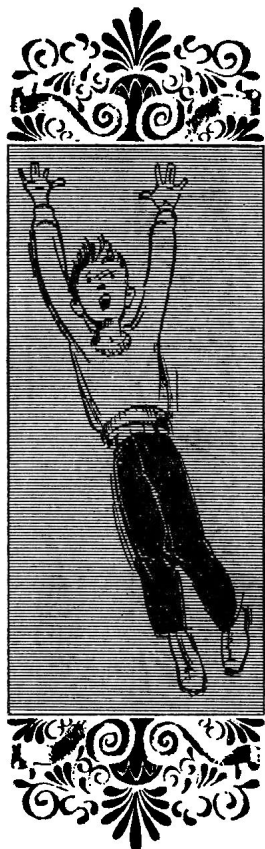
ベバリイ＝クリアリー作

松岡享子訳

ルイス＝ダーリング画

# OTIS SPOFFORD





いたずらっ子オーチス もくじ

5 オーチス男おとこをあげる

39 オーチスと紙かみつぶて

68 オーチスと科学実験かがくじっけん



176

オーチス対<sup>たい</sup>エレン

141

大<sup>だい</sup>會<sup>しゅう</sup>長<sup>ちやう</sup>オーチス

107

オーチスと三十<sup>さんじゅう</sup>ぴきの昆<sup>こん</sup>虫<sup>ちゅう</sup>

OTIS SPOFFORD

by Beverly Cleary

Original English edition published  
by William Morrow & Company, New York

Copyright 1953

Japanese translation rights arranged  
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

---

●訳者のご紹介

この本を訳された松岡享子先生は、神戸に生まれ、慶応義塾大学図書館学科を卒業のち渡米。ウェスタンミシガン大学大学院で児童図書館学科に学び、ボルチモア市の公共図書館に勤めました。帰国後、大阪市立中央図書館に勤め、その後、自宅で家庭文庫をひらきながら子どもの本の研究と普及につとめ、そのかたわら海外の児童文学の翻訳と創作にご活躍され、現在は財団法人東京子ども図書館の理事長もなさっておられます。

主な訳書に「町かどのジム」「ゆかいなヘンリーくんシリーズ」(ともに学研)、「くまのバディントン」(福音館)などがあり、創作に「なぞなぞのすきな女の子」(学研)、「くしゃみくしゃみ天のめぐみ」(福音館)などがあります。



## オーチス男おとこをあげる

なにがすきといって、オーチスは、ちょっとしたさわぎをひきおこすくらいすきなことはほかにありませんでした。オーチスハスポフォード。背せは中ちゆうくらい。かみの毛けは赤あかみがかった茶色ちやいろ。そばかすがあつて、耳みみがうんとつきでた男おとこの子こです。よく皮かわのジャンパーをきていますが、そのチャックには、ウサギのしっぽがついていました。くつにはいつも暗くらいところで光ひかる種類しゆるいのくつひもをつけていましたが、それも右みぎがピンクで、左ひだりがみどりと

きていました。

オーチスは、うちのまわりでは、あまりさわぎをひきおこすことができませんでした。遊べる庭のついた一けんだちのうちにすんでいたら、もっといろいろやれたでしょう。ローズモント小学校の十一番教室のほかの子みたいに。でも、オーチスのうちは、アパートでした。オーチスは、おかあさんとふたりぐらして、おかあさんのヴァレリー・トッド・スポフォードは、徳用薬局の二階にあるスポフォードバレエ教室で、バレエとタップダンスを教えていました。だから、ほとんどうちにいません。

オーチスは、おかあさんがもっとうちにいてくれたらいいのに、と思っていました。したら、アパートの管理人のブリースターさんのおばさんに、しょっちゅう見はられていなくてすむからです。オーチスのおかあさんは、オーチスがちょっとしたさわぎをひきおこしたがつたからといって、けっして本気で起こったりはしませんでした。けれども、ブリースターさんのおばさんときたら、どろはきらい、犬はきらい、やかましいのはきらい、おまけに男の子のばかさわざはだんじてゆるしません、という人だったからです。



しかし、学校はべつでした。オーチスは、なにかを勉強しなければいけないということ  
をのぞいては、学校がすきでした。学校でなら、いくらでもちよつとしたさわぎをひきお  
こすことができましたからです。

一週間にいちど、受け持ちのギトラー先生は、フォークダンスをしにみんなを講堂へつ  
れていきました。組じゅうでこの時間がきらいなのは、オーチスただひとりでした。

ドッジボールのほうがいいなあ。それなら毎日でもいいけど。オーチスは、列になつて  
ろうかを歩いていくとき、いつもそう思うのでした。ダンスなんか、スポフォードバレエ  
教室で見るだけでたくさんだ。

オーチスたちの組は、これまでに『片足とびのおばかさん』とか、『グーズベリーのや  
ぶで道にまよってしまった』とか、いろいろのダンスをならいました。しかし、ここ何週  
間かは、メキシコのフォークダンスをならっていました。これは、ローズモント小学校が  
PTAの総会でやるフィエスタ（お祭り）のためでした。どの組も、メキシコのダンスを  
一つおどるのです。そして、そのあとで、PTAのおかあさんたちが、ジュースとクッキ

ーを売って、視聴覚器材を買うお金をあつめるのです。

オーチスは、フィエスタなんかいつこう気のりがしませんでした。PTAだって、きつとフットボールの試合かなんかのほうがずっといいというにきまっている、とオーチスは思いました。

オーチスの組は、男の子のほうが女の子より三人多いのです。ということは、あまった三人のうち、ふたりは男同志で組み、いやでもどっちかが女の子にならなければならないし、のこる三人目は、ひとりでおどらなければならない、ということでした。そして、オーチスは、たいていこの三人目でした。だれもオーチスのパートナーになりたがらなかったからです。オーチスは、左足でとばなければならないときに、よく右足でとびました。これは、パートナーのつまさきにとつてはさいななでした。

しかし、オーチスは、だれも自分のパートナーになつてくれないことなんか気にしませんでした。きょうも、ひとりでステップをふみながら、わざと足をぼうのようにつつぱつておもしろがっていました。

ギトラ―先生<sup>せんせい</sup>は、レコードをとめていいました。

「オーチス、ちゃんとなさい。」

「先生<sup>せんせい</sup>、どうしてぼくもフィエスタなんかにでないといけないんですか。」と、オーチスは文句<sup>もんく</sup>をいいました。「ぼくがでなくても、この組<sup>ぐみ</sup>には男の子<sup>おとこ</sup>があまっています。」

「そうです。」と、スチューイー・ヒックスがすぐに同調<sup>どうちよう</sup>しました。

ちえつ、またスチューイーのやつ、とオーチスは思<sup>おも</sup>いました。これだから、スチューイーってやなんだよな。おれがひとさわぎおこそうとしたら、すぐわりこんできやがるんだから。

すると、おどろいたことに、ギトラ―先生<sup>せんせい</sup>はにっこりわらって、こういいました。

「あまっている三人<sup>にん</sup>の男の子<sup>おとこ</sup>には、先生<sup>せんせい</sup>がちゃんとべつのことを考<sup>かんが</sup>えています。」

ええつ、なんだろ？ もしかしたら、フォークダンスよりもつとやばいことかもしれな  
いぞ、とオーチスは思<sup>おも</sup>いました。

「ダンスをしている輪<sup>わ</sup>のまん中で、闘牛<sup>とうぎゆう</sup>をすることにしたのです。ひとり  
は闘牛士<sup>とうぎゆうし</sup>に、あとのふたりは牛<sup>うし</sup>の衣<sup>い</sup>しょうをかぶって、牛<sup>うし</sup>になってもらいます。」

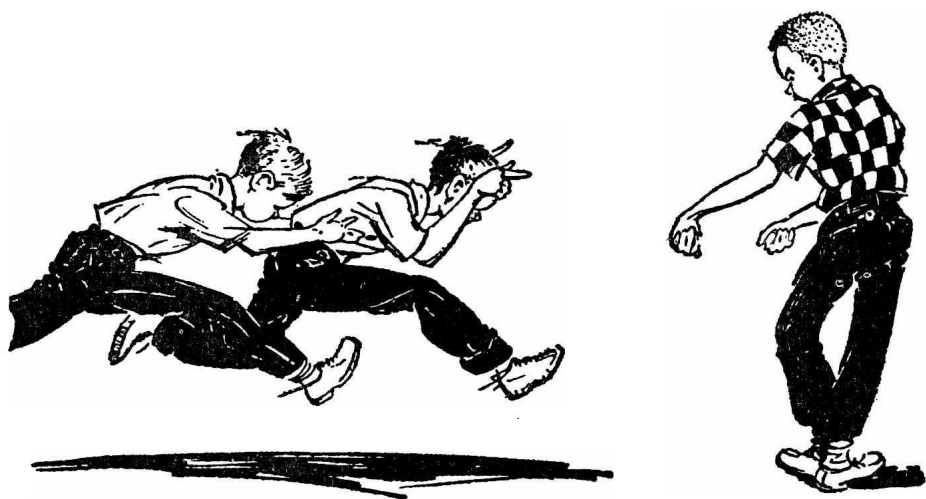
牛の衣しようと聞いてみんながどつとわらったので、先生は、ちょっとことばをきりました。

「ダンスのおわりところで、闘牛士が勝って、牛がたおれます。そしたら、女の方は、かみにさしている花をぬいて、闘牛士に投げてください。」

この考えは、オーチスの氣にいりました。自分が闘牛士のかっこうをしたところが、目に見えてきました。赤いケープを牛の前でひらひらさせ、牛が突進してくると、さつとすばやく身をおかわす。おわって見物の人たちにおじぎをすると、女の子たちは自分の上に花の雨をふらせ、お客さんたちは拍手かっさいする……。うん、それなら、フィエスタもまんざらすてたもんでもないぞ……。

いい氣分で空想にふけていたオーチスは、ギトラー先生のことばで現実にひきもどされました。

「オーチス、あなたはダンスがきらいなんだから、牛の半分になってもらいます。」  
みんな、わらいました。



「前の半分ですか、うしろの半分ですか？」と、オーチスはききました。

「前の半分です。」と、ギトラー先生はいいました。「スチューイ、あなたがのこりの半分。」

そして、ジョージ、あなたに闘牛士をやってもらいましょう。」

ジョージが、闘牛士に指名されて気をよくしているのが、オーチスにもわかりました。ふん、まあいいや。牛の前半分になるのもわるくはない。ダンスよりはましだ。ようし、スチューイとふたりで、ひとあばれするか。

それから、ギトラー先生は、三人の男の子たちに闘牛の練習をさせました。スチューイがオ

ーチスの腰を両手でつかみ、ふたりはジョージめがけて突進します。すると、ジョージは、もっているつもりのかいばしをくるりくるとひるがえします。ジョージが剣で牛をつきさすまねをしたところで、オーチスとスチューイーは床にたおれました。

「いいの、いいの、オーチス。なにも牛が前足を宙におったてて死ぬことはないと思うわ。床にたおれるだけでけっこう。」

オーチスは、床にたおれたまま、ジョージがおじぎをし、女の子たちがジョージに花を投げるまねをするのを見ていました。ふん、ジョージのやつ、いい気になってやがら、とオーチスは思いました。

休み時間の鐘がなると、オーチスはジョージのあとをつけて歩いて、

「おお、とーぎゆうしーよ

ゆかにつばをはくなく

たんつばをつかえーよ

たんつぽはそのためのものー」

と、うたいました。

もちろんスチューイもいっしょになってうたいました。オーチスは、ジョージが、にや  
つとわらって、「よせよう。」といったただだったので、ちよつとがっかりしました。

いよいよフィエスタの日がやってきました。その午後、ローズモント小学校は、お祭り  
気分<sup>きぶん</sup>にわきたっていました。女の先生<sup>おんなせんせい</sup>は、みな白いブラウスに、すそまでの長いスカート  
をはき、かみに花<sup>はな</sup>をさしていました。校長先生<sup>こうちょうせんせい</sup>のハウ先生<sup>せんせい</sup>さえ、メキシカンハットをかぶ

り、腰<sup>こし</sup>に赤いサッシュをまいていました。校庭<sup>こうてい</sup>

では、PTA<sup>ピーティーエー</sup>のおかあさんたちが、ジュースと

クッキーのスタンドをこしらえ、そのまに教室<sup>きょうしつ</sup>

の中では、先生<sup>せんせい</sup>が子どもたちにダンスの用意<sup>ようい</sup>を

させていました。



ギトラー先生の顔は、ぼうっと上氣していました。先生は、男の子たちのズボンにかざりのすじをいれるため、かみのリボンをセロテープでせつせとめていました。オーチスとスチューイは、牛の衣しょうのうち、足のほうは、もうはいていました。それは、ズックでできたパジャマみたいでした。ふたりは、牛らしく歩くけいこをしていました。オーチスは、とびながらあとずさりするなどというステップをいくつか考えだしました。牛の衣しょうの上半分をきるのが待ちどおしくてたまりません。

女の子たちは、上は白いブラウス。下は、すそにクレープペーパーのフリルをつけたフレヤースカートをはいて、これまた、かみにピンで花をとめるのにいっしょうけんめいでした。

「いいこと、オーチス、へんなまねはしないでね。」と、ギトラー先生は、こんどは男の子たちの腰に、クレープペーパーのサッシュをむすびながら、いいました。

オーチスは、ちよつとびくつとしました。まだ、なんにもしていないのに。ギトラー先生、どうしてぼくがひとさわぎおこしてやろうとねらっているのをしているんだろう？



オーチスは、エレンIIテレビッツがかみの毛をつまんでひっぱりながら、オースチンIIアレンに、「あたしの毛はやくのびて、三つあみにできるようになるといいんだけど。」と、いつているのを聞きました。エレンは、そういつてから、頭をうしろへかたむけ、かみの毛が首すじにあたるようにゆすりました。「こうやると、毛が長くなったみたいなきがするの。」

オーチスは、ほかのどの子より、エレンをからかうのがすきでした。エレンのどこが、自分にそんな気をおこさせるのかわかりません。もしかしたら、エレンが、あまりにも清潔で、きちんとしていて、おぎょうぎがいいからかもしれない。あるいは、ちょっとからかえばかならずおこる、とわかっていたからかもしれない。いまでも、オーチスは、エレンのまねをして、頭をうしろへそらせると、

「あたしの毛、長くなって三つあみにできるようになるといいんだけど。」と、へんなキイキイ声でいいました。

「もう、ほんとに、いやーねっ。」と、エレンはおこりました。